

「却温神呪」成立の背景と首楞嚴思想

小林 圓 照

はじめに

わが臨濟宗で読誦依用される数種の陀羅尼のうち、「却温神呪」とその母胎經典である『仏説却温黄神呪経』とについては、本派の「教学研究紀要」第五号（以下「紀要五号」と略す）の七三〜八九頁の中で、「却温神呪」を読誦する効果——『仏説却温黄神呪経』訳注——と題して、妙心寺派教学研究委員会編による研究報告が発表された。その解説、原文、訓読、現代語訳、注記のどの作業も、ほぼ完璧といえる成果を得ている。この労作について、陀羅尼研究の経験のない小私の如きが関説する余地はないのであるが、「解説」（本多道隆師ご担当）の文中に、「却温神呪」が所説内容とする『却温黄神呪経』（以下『却温経』と略す）はその訳出時期や訳者を含め、来歴については全く定かではない經典ということになる。」（七六頁）という一節を拝読して、これは一考を要するものであると気づいたからである。「紀要五号」に明らかなように、きわめて詳細な本派教学委員会の検討にも係わらず、このような課題の中核をヒットしない唯一の理由は、『却温経』本文の冒頭に挙げられている「維耶離国の疫病事件」とその周辺への視点が抜け落ちているから

ではないかと推定した。先ずこの点を中心にして考察した結果、しだいに『却温経』編成の史的背景および素材と経形成のプロセスが、ほぼ明確になってきた。

一 ヴァイシャーリー（維耶離国）の疫病と釈尊による救済譚

ここでいう「維耶離国の疫病」というのは、仏陀・釈尊の在世のころ（一説では、仏成道ののちの五年目の南安居の直前ごろとする）、ヴァイシャーリーにおける疫病の発生と、それに対処する釈尊の救済巡行譚である。この伝承が史実であったかどうかについては、未だ検討されてはいないが、古くからパーリ語経典、漢訳経典ともに説かれており、とくに南伝仏教では、パリッタ誦呪として、その筆頭に位置づけられている『ラタナスッタ』（宝経）に関連する古因縁譚に属し、また『ダンマパダ』（法句経）や『スッタニパータ』（経集）に対する注釈書に見出だすことができる。この地での救済が成功したのち、釈尊に従う出家者が輩出したことも具体的に窺える。また後代、この伝承に基づいて、セイロン（スリランカ）島の王・ウパテッサの時代に、飢饉・疫病に対して、それを範とした類似の巡行行事を執行したケースが『小王統史』に認められる。

いっぽう、北伝ないし大乘により接近した関連でいえば、この伝承の素材としては、大衆部から分派した説出世部に属し、律藏に関わる説話集である『マハーヴァスツ』（大事）に見出だすことができる。この経は、部派から大乘を触発したマトリックス（母胎）ともいえる存在であり、ここで問題となる疫病救済譚は、この経中の「チャトラ・アヴァダーナ」（日傘説話）に説かれ、次のような内容になっている。

釈尊在世のとき、商工の盛んな都市ヴァイシャーリーにおいて、飢饉が原因で疫病が流行し、壊滅的な打

撃を受けた。あらゆる手段が講ぜられたが、止まらず、最後に王舎城に留まっていた釈尊に、リッチャヴィ族の賢者・トーマラ首長のマハリーが代表となつて赴き市民の救済を願ひ出るといふのが発端である。ビンビサーラ王（アジャータタシヤトル王とするテキストもある）の許可を得て、釈尊は王の仕立てた従者や軍隊に護られた五色輝く車列と伴にガンジス川の南岸に向かい、到着後、用意された船により渡河し、北岸の船橋に迎え待つヴァイシャリー市民のリッチャヴィ族は、五色の馬、車、蓋、幡、裝飾などで歓迎した（『除恐災患経』・五五三頁・中）。そこで釈尊は、供養された傘蓋の数だけ仏陀を化作して説法するという神変が説かれる。白傘蓋の供養を受けた釈尊がヴァイシャリーの領域に入り、城門の闕（しきい）を踏んだ途端、疾病の原因となつていた病魔が逃走し始め、更に仏陀への讃頌を唱えることによつて、その国都の領域が浄化され、疾病は沈静化するのである。パーリー注釈などでは、釈尊に指導されたアーナンダ（阿難）が仏鉢から水を撒いて（洒水）、『ラタナスッタ』（宝経）を唱えることによつて解決する（参考論文（2）参照）。

この説話には、他の多くの異なつた伝承があり、前述したように『宝経』の注釈に始まり、『増耆阿含経』（第三十二）、『菩薩本業経』、『除恐災患経』、『木櫛経』、『撰集百緣経』、『根本説一切有部業事』、『大護明大陀羅尼経』などが挙げられる。とくに『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』は最も發達したこの伝承のなかに、観音救済信仰をも導入したものと見て注目されている（参考論文（1）参照）。

小私は、十数年前からこの伝承に関心を持ち、「釈尊のヴァイシャリーへの救済進行」と呼んで、「首楞嚴（スーランガマ）＝英雄的な前進」の具体的で、代表的な利他行の典型であると見なしている。むしろ「首楞嚴」の思想（略して「楞嚴思想」と称してもよい）が、ここに淵源するのではないかと考察するに至っている。この思想は、これらパーリ護呪（パリッタ）だけではなく、漢訳の諸誦呪や陀羅尼などを産み出す水源になつた。さらに初期の主要な三昧經典の『首楞嚴三昧経』や間接的には後代、『首楞嚴経』などの

大乘經典をも産出する思想的・実践的母胎であったと推定している。わが宗の「楞嚴行道」も溯ればここから出發した。のちの密教經典、真言陀羅尼などは無論のことである。

また五・六年まえから、この伝承の関連で、『維摩經』の仏国品のモチーフ、例えば仏陀に供養された五百の傘蓋が三界を覆うような大傘蓋と化して出現したり、仏陀の足指按地の行動が、ヴァイシヤリーを仏国土（浄土化）に変容して見せるなどの仏陀の神變の経説も、この「首楞嚴」の思想との接触から発想・編成されたとの見解を發表したことがある（参考論文（3）参照）。

この観点からすれば、臨済宗で依用する大部分の誦呪文や陀羅尼の出発点がこの思想に発するともいえる。この視点から『却温經』を検討した結果、この経編成の素材として、同じ救済譚に属する『恐除災患經』と『灌頂經』（第九卷）と一種の治病の陀羅尼である『仏説呪時氣病經』などがこの課題に該当するものとして推定できる。要するにこれら諸經典と『却温經』の内容が、単に類似しているのではなく、むしろ翻訳の誦呪經典を素材にして、『却温經』という二次經典を編成したと考えられる。以下、『却温經』本文（下段）に従って、素材と推定される関連の経文を対照しつつ検討したい。

二 『仏説恐除災患經』（大正藏十七・五五二上）と『却温經』（紀要五）八〇頁

(1) 両經の冒頭がほぼ一致する点から考察したい。

聞如是。

一時、仏遊王舎城竹林精舍。

聞如是。

一時、仏遊王舎城竹林精舍。

与四部弟子大衆俱会。

与四部弟子大衆俱会。

説上妙法。

為説経法。

冒頭の状況としては、仏陀釈尊は、王（ここでは阿闍世王）の要請で、雨安居前に、弟子たちと伴に竹林精舎にきていた時に相当する。

(2) 維耶離国の疫病の状況もほとんど同文である。

爾時、維耶離国、萬氣疫疾、

爾時、維耶離国、属疫氣、

威猛赫赫。猶如熾火、死亡無數。

猛盛赫赫。猶如熾火、死亡無數。

無所帰趣、無方療救。

無所帰趣、無方救療。

(1) (2) 部分の両経対比の結果から『却温経』の冒頭は、『恐除災患経』を素材としていることが明らかとなる。疫病「温黄」（発熱性の急性伝染病）に対処する専門の経と呪を編成することを意図している。「ヴァイシヤリーの疫病譚」を重視して、この部分をもっとも正統性をもった経証と認めて制作したことが窺える。

三 『灌頂経』（卷第九・大正蔵二十一・五二二上）と『却温経』との対比

『灌頂経』のなかでも卷第九は「仏説灌頂召五方龍撰疫毒神呪上品経」と呼ばれ、内容的にも首楞嚴「救

「濟譚」を受け継いでいる。発端の部分も『恐除災患経』と重なり、最適の経証を含むと認めて採用されたと
思われる。

(3) 阿難の救難要請

於是、阿難……長跪合掌、而白仏言、
維耶離国、(遭此疫毒病) ……
唯願世尊、(聖術) ……(令彼衆生得脱
厄難、解脱彼苦、得聞法音。)

於是、阿難長跪合掌、白仏言、
彼維耶離国、遭温気疫毒。
唯願世尊、説諸聖術、却彼毒氣、
令得安穩、離衆苦患。

いわゆるこの救濟譚に関連する同類經典(首楞嚴思想の經典)、例えば前出の『恐除災患経』などでは、
阿難も登場するが、救難要請者の役目はしない。維耶離国からの使者が世尊に救難要請をする。この箇所
の両経(『灌頂経』と『却温経』)は、使者と其の役目の記述を省略するために、阿難に要請の代役をさせ、
単純化したものと推定できる。また連続した文中ではないが、同経に(聖術)などの用語もある。

(4) 疫病の原因は七鬼神であること(『灌頂経』は竜王・小竜・鬼神など)の表明と解決法が指示される。

(賢者阿難) ……
(吐悪毒気、侵陵万姓)

仏告、賢者阿難、汝当聴受之。
有七鬼神、常吐毒気、以害万姓。

(中毒病者、頭痛寒熱、百節欲解、)

(皆当説名字護病者身)

(消毒不害病者)

○ 若人得毒、頭痛寒熱、百節欲解

苦痛難言、人有知其名字者、

毒不害人。是故吾今為汝説之。

『却温経』ではこの疫病の原因は、毒気を吐く七鬼神であるが、『灌頂経』九の場合は、状況により、諸竜王、小龍、および山精・魅鬼などである。これらに毒気を当てられて、人々(万姓)は、頭痛や寒熱で、身体が今にもバラバラになりそうな、云うに云われぬ程の苦痛に襲われる。ただ、その鬼神等の名前(名字)を明知しておれば、毒害から逃れられる。神呪のなかでそれを唱えて、相手を知り、鬼神名を挙げ、コントロール(撰)して、退去を命じ、追い払う(除遣)ことになる。疫病の対象は異なるが、解決法の中心は、この『灌頂経』九を採用している。

(5) 鬼神名を挙げる前に先ず、三宝帰依に依つて加持をえる。三宝帰依の文は、神呪一般にみ認められる。その具体名や追加の菩薩名、あるいは諸師・弟子などは状況に依つて添加される。下段の『却温経』の三宝名の語尾のみが、梵語として「耶」(aya、与格単数)を示し、以下が変化せず、そのアンバランスに無自觉なのは、中国撰述であることの一証左でもある。次の上段は「仏説呪時気病経」(大正蔵二十一・四九二頁上段)の三宝各名の例である。

阿難言、願欲聞之。

仏言、若四輩弟子、欲称鬼神名安之時、

(南無仏、南無法、南無比丘僧。

南無過去七仏、南無現在諸仏、南無未來

諸仏、南無諸仏弟子、南無諸師、南無諸師弟子。)

当言、

「南無仏陀耶、南無達磨耶、南無僧伽耶、

南無十方諸仏、南無諸菩薩摩訶薩、

南無諸聖僧、南無呪師、(某甲。)

三宝帰依とその讃誦の唱名は、この類の陀羅尼の基本である。むしろパリッタの『宝経』にある如く仏教陀羅尼そのものが、「三宝帰依の讃頌」に始まったといつてもよい。三宝讃誦によって、三宝の威力を獲得する(加持を得る)のである。十方諸仏・菩薩については、大乘の立場からの添加であり、聖僧・呪師を挙げるのは、特種、具体的な目的をもって唱える者への加勢を要請するためのものである。

(6) 「沙羅伽」(サラギヤ)の三唱とその意味

『灌頂経』には、該当なし。

今我弟子所説神呪、即從其願。

如是神名、我今当説。

「沙羅伽(沙羅伽、沙羅伽)」。

此の呪文を唱える弟子(われわれ)の鬼神撃退の願いによって加持を要請し、三宝の加護力によって、温病治療の効果が發揮される。それ故、「沙羅伽」(サラギヤ)と三回唱えなければならぬ。問題は、「沙羅

「法」が、三宝に対して「追い払い給え！」と云う意味なのか、七鬼神に対して「退去せよ！」と叱咤しているかのどちらなのである。無論、「疾去、疾去」の句はあとの(8)イ項に出てくるのであるが。原梵語はどれに当たるのであろうか。後に出る *visarata*, *visara* の例に従うとすれば、*saraga*, *sarga* などの梵音が推定できる。疑問の詳細な検討は、専門の識者の見解に待つ。

四 『仏説呪時氣病経』(大正藏二十一・A本・四九一上、B本六三二中・下)〔B本の異字は(括弧)内で示す〕と『却温経』との対比

(7) 七鬼神の名字を挙げる。

令我所呪、(礼是已便説是呪)、即従如願、

〔阿佉尼、尼佉尼(尸)、阿佉耶(那)、

(尼佉尼)、阿毘(比)羅、慢多利(梨)、

(尼佉尼)、波池(陀)尼、波提梨。〕

三説「沙羅佉」已、便説呪曰、

〔夢多難鬼、阿佉尼鬼、尼佉尸鬼、

阿佉那鬼、波羅尼鬼、阿毗羅鬼、

波提黎鬼。〕

仏言、是七鬼神呪、名字如是。

『却温経』の七鬼神とは、七母神(サブタ・マートリー||七摩且里天)を指すようであるが、疫病との関連が明らかではない。今の所、『呪時氣病経』に出ているものが、一応 梵音として対応しているが、詳細については、検討すべきであろう。表示の第三段は『灌頂経』(巻第二)所収の『仏説灌頂七万二千

神王護比丘呪經』(四九五頁・中下)所説の十神王名のうち、比定できる八王を配した。ここでは、十神王の名号を呼ぶことに依つて五温鬼が退散する。「各テキストの異字は(括弧)内で示す。」

夢多難鬼(謨多南鬼) 〓 慢多利(梨) 〓 慢多羅〔一応、対応したが別の鬼かもしれない。〕

阿佉尼鬼 〓 阿佉尼 〓 阿佉尼

尼佉戸鬼 〓 尼佉尼(戸) 〓 (尼)佉尼

阿佉那鬼 〓 阿佉耶(那) 〓 阿佉尼

波羅尼鬼 〓 波池(陀)尼 〓 波陀尼

阿毘羅鬼 〓 阿毘(比)羅 〓 阿比羅

波提梨鬼 〓 波提梨 〓 波提梨伽

となるが、残つた二つの(尼伽尼)は、例えば、女性名詞語尾 *-or* (尼) + (衆、一群、従者を意味する) *gani* or *gane* (伽尼) のような長い複合語の語尾であろうか。大黒天の侍女(七女夜叉)説もあるが、七母神それぞれに眷属する女鬼か。これらの還梵や同定の作業は小生には力不足である。陀羅尼の梵音本来からすれば「鬼」の字は不要であろうが、整理(中国化)して七鬼と明示したと思われる。

(8) 温熱をもたらした鬼神を撃退するための神呪誦持と具体的な作法を順次に述べる。

(イ) 神呪誦誦の作法と効果

○ 若人熱病時、当呼七鬼神名字、

「速出、速出、…今当速去。」

一 言、「疾去、疾去、莫得久住。」

(毘奈耶藥事) 一 我弟子身、令毒消滅、病速除愈。

「疾去、疾去、莫得久住」は、リズムもよく病鬼への最後の一撃となるが、同類經典の『根本說一切有部毘奈耶藥事』(大正藏二四・二六―二七頁)では、該当句は、「速出! (四回) 速去、速去! (汝等若欲惡心者)、今当速去!」である。対応する梵語は、nirgacchata. nirgacchata. nirgacchata. nirgacchata (速出) kṣipram palayata! (今当速去) ma tsihantu! (停莫住) 対処の陀羅尼呪としては、「毘娑羅他」(visarata) 四回、または「毘娑羅」(visara) 四回を唱える(参考論文(1) 七四四―七四七頁参照)。

(口) 三宝帰依と神呪読誦の威神力を顕示する。

我弟子、今歸依三宝、焼香礼敬、

行是諸仏所說神呪。

○ 若有鬼神、不隨諸仏教者、

一 頭破作七分、如阿犁樹枝。

「頭破作七分、如阿犁樹枝」は法華經にあって有名であるが、神呪經典では諸処にみられる。

(ハ) 対処法として、病人に神水を飲まして、神呪を更に読誦する。同類經典では、病人には洗身、その汚染場所では洒水が一般である。神水の製法なども不明である。清浄な泉水や河川の水を用いたものか。

一日……乃至七日が一般であるが、
（一日……乃至四日）のケースもある。
（四方と中央の赤・白・青・黒・黄気の
五温鬼）

若人得病、一日二日三日、乃至七日、
熱病煩悶、先呪神水、以与病者飲之。
当三七遍、誦此呪経。病毒五温之病、
並皆消滅。

五温の病に関しては、その原因が五温鬼であることが推定できる。

『灌頂経』卷第八（五一九頁・下）では南方赤气温鬼、西方白气温鬼、東方青气温鬼、北方黒气温鬼、中央黄气温鬼に該当する。ただ七鬼神との関連が問題だが、五气温の症状ということであろうか。またインドの五温鬼神と中国の五温鬼（女鬼ではなく四季節と総監の五力士とする、「紀要五号」参照）との関係も興味のあるところとなる。

（二） 対処法として、門を（仮）設立し、門額に鬼神名を書き、その神名ごとに、五色の縷線を結びつけ門上に掲示する。遠くは、釈尊のヴァイシャリーへの車列が五色に荘嚴されていることを持ち出すまでもなく、この関連での五色の縷線の使用は、一応、インド起源と推定したい。その用例は、『千手経』、『灌頂経』や『陀羅尼雑集』などに一般に見られる。例えば「誦呪すること五遍、五色の縷を結び、十四結と作し、両手（病痛の処など）に繋げる。」（五三八頁・下）中国の五色との関連も興味があるが、各色の順序に相違がある。次の上段は、『仏説呪時氣病経』B本（六三三下）、（A）本（四九一上）〔A本の異字は（括弧）内で示す〕。

○ 若亦立門、書著氣病者、

當額書七鬼神名字、復取五色縷線、

各各結其名字、繫著門上、大吉祥也。

○ 若人得時氣（疾）病、結縷（縷結）

七過呪文、並書紙上鬼神名字。

○ 若紙槐皮（著紙）上繫著縷頭。

（ホ） 対処の実効を永く上げるため、この呪経を専心受持し、齋戒して、（十方諸仏に礼敬し）誦経に勤める。イ○は「灌頂経」九（五三中）、ロ○は『仏説呪時氣病経』A（四九一上）にある。

イ○当澡漱口齒清浄、受行齋戒。

不食五辛、不得飲酒敢肉。

若能勤誦此経、専心受持、齋戒不喫

薰辛、誦此七鬼神名字、温鬼永断、

不過門戸。自進至患家、鬼見皆走

ロ○読是呪時、当齋戒清浄、澡漱烧香、

正心乃之説。

一身永不染天行。

（へ） 他の人にも、この神呪経を勧めて、書写、受持、読誦をさせる。それができない人には、経を竹筒に入れて、門戸に載せれば、温鬼の侵入を防ぎ、息災で長生きができる。この場合の門は、仮設の門ではなく、家宅本来の門であろう。これらの対処法については、中国的な活用かもしれない。むしろ逆に五温黄にたいする中国の民俗的な対処法を一致させるか、導入して自家薬籠化したのかも知れない。

○『除恐災患經』や『灌頂經』第九卷
にも、該当なし。 — 若能専心、勸人書写受持、讀誦此經。
— 消殃却害（無事不害）。

○両經に該当なし。ただ「長寿、吉祥」○ 若人不能誦、得竹筒盛、安門戸上、
をえる記述はそれぞれに散見できる。 温鬼不敢過門、亦說延年養壽、

— 大吉祥也。

(9) この神呪經の流通分（經名の決定と歡喜奉行）である。『灌頂經』一般にこれに類した流通分となつて
いるが、一応、『灌頂經』卷第九と対応すると、形式手法は明らかに『灌頂經』を素材にしたことが判る。

阿難問仏言。說是語已、当何名之、

云何奉行。

仏言阿難、此經名為「灌頂大神呪經」

又名……………如法受持。

大衆人民天龍鬼神、聞經歡喜、

作礼奉行。

(大正藏・五三三下)

阿難、又手白仏言。当何名此經。

云何奉持。

仏言、此經名為「却温神呪」

仏説如是。

天龍鬼神、一切大衆、聞呪歡喜、

作礼奉行。

却温神呪經

これまでの『却温経』本文（下段）に沿って、順次、他の文献（上段）と対照した結果、『却温経』が、数種の神呪経や陀羅尼などを素材として構成されていることが明確になった。疫病・温黄（発熱性の急性伝染病）に対処する特別の目的で編成され、実践的に、簡にして要をえた中国撰述の神呪経と言える。その経中から「神呪部分」が抽出され、臨済宗で依用されていることになる。以上のことから、ほぼ「却温神呪」の成立の位置づけができたように思う。ただその成立時や依用については、諸師の研究に期待するのみである。

【参考文献】

- (1) 「梵文葉事欠損箇所的部分的補填——ヴァイシャーリー疫病伝説——」岡田真美子著（印度学仏教学・高崎直道博士論集・一九八七）
- (2) 「仏典大乘化の手法——首楞嚴（シユールランガマ）の意義」小林圓照著（宗教研究・七七卷三三九号四輯・二〇〇四年三月）
- (3) 「大乘化の手法——維摩経・仏国品のケース——」小林圓照著（印度学仏教学研究・五二卷一号・二〇〇四年三月）

（注記）この論の冒頭で述べたように、本派の『教学研究紀要』（第五号七三頁〜八九頁）に、本文・読み下し・現代語訳・注釈

にいたるまで詳細な研究が記載されているのであるから、この拙論を読むときは、必ず並行して読んで内容を深めていただきたい。本派においても過去、多くの陀羅尼研究の勝れた学匠が居られたのであろうが、小私はこのことには関心も薄く、不勉強で、大衆で天台学の講義を拜聴した伊藤古鑑先生の『禪宗聖典講義』しか思い浮ばない。小僧の時に習った常用の陀羅尼を憶えているだけであった。

最近になってインド学の木村俊彦師、竹中智泰師、中国学の野口善敬師の、それぞれのご専門を生かされた研究の成果によって、臨済宗の陀羅尼研究は画期的な展開をみた。このことは衆目の認めるところであり、このような宗内の学究の勢いをえて、教学研究委員会の諸師による、数年に亙る「陀羅尼経典研究」には刮目

すべきものがある。その貴重な作業の集大成として、このたび『禪門陀羅尼の世界』（野口師編集・禅文化研究所刊）も出版され、拝読可能になったことは誠に法幸・慶賀の至りである。かつて教化センターでお世話になった一員としても、有り難く感謝している。これら諸師の研究は、疫病救済に立ち向かった世尊の持

つ、正法の前では何ものにも障碍されない、利他勇猛の精神（楞嚴思想）に、しっかりと繋がっている。混迷する現代社会においても、この神呪読誦の背景を知ることによって、その意義を汲み取ることができよう。

（了）